

斎藤茂吉・中村憲吉の来別

佐藤 嘉一

一

斎藤茂吉の来別に関しては、すでに「別府市誌」（昭和六十年刊）第八章「訪れた文人墨客」の第二節「明治以降訪れた文人墨客」の項で紹介されている。執筆者の大塚俊英氏は、文章に携わる者の基本的な姿勢である関係資料の提供を受けた経緯を明確にし、記述も簡明で要をえている。ここではそれを土台にして二、三記すことにしたい。

二

茂吉は第一歌集「赤光」（大正二年刊）で短歌に近代的な自我を盛込むことに成功し、短歌製作者としての地位を確立した。第二歌集「あらたま」（大正十年刊）に続いて別府を詠んだ二首を収録しているのが、第三歌集

「つゆじも」である。

これは大正七年から同十年までの作六百九十七首を収める。平明ななかに気持の感じ取れる作があつて、「赤光」とも違い、「あらたま」ともまた異なつた世界を詠出している。刊行は遙かに後れて昭和二十一年であるが、その後記に「この歌集は昭和十五年の夏に編集した。」と記しており、これを「日記三」（全集第三十一巻）でたどると、昭和十五年八月二十四日に「夜ハ長崎時代ノ手帳ヲ見ル」と出ている。以後数日間にわたつて同様の記述がみえ、この間が編集の時期である。

日記に「手帳ヲ見ル」とある「手帳」は、茂吉がその折々に克明に記入したもので、全部で六十五冊あり、すべて死後に発見され、今は全集の第二十七巻、八巻に収録されている。「手帳」は記された時期の明瞭でないも

もあり、また他の「手帳」の記事と重複しているものもあるが、大正八年から始まって昭和二十五年まで、医学関係のメモ、書物の摘記、見聞したことの覚書、講演を聞いての要点記入、その折々の関係者の住所を記したりして変化極まりない。「手帳」によっては歌の初案を記し、推敲のあとに残して、茂吉を知る上では不可欠の資料となっている。

「つゆじも」には他の歌集と違って詳細な詞書を随所に付しているが、それはすべて右「手帳」一から四をもとに纏められた（「手帳」の番号は年代順に配列して全集編集者で付したものである）。

別府での歌は、歌集の最初から数えて四七五首目と六首目の次の二首である。

あたたかき海辺の街は春菊を

既に売りありく霞は遠し

鳥の音も海にしば鳴く港町

湯いづる町を二たび過ぎつ

この作の前に次の詞書が入る。

三月十八日。午後一時小倉発、午後四時四十二分別府着、別府／には大正八年夏一たび来りき。街見物保養院長鳥潟博士訪問、／博士は大学同窓也。大分共進会を見る。

これは大正十年のことであり、二十年後の昭和十五年八月の編集時にこれ程細かな記述ができたのも「手帳」があったからで、関連の部分を「手帳四」（全集第二十卷。四は大正十年三月からヨーロッパ留学に旅立つ前の九月までのことを記す）より抜き出せば次の通りである。

午後一時小倉発／午後四時二十五分頭成着／海美シ
／午後四時四十二分別府着／河岸鶴田旅館著／電話
460保養院長宅 215保養院出張所 318保
養院長宅（中略）別府ノ町ヲ散歩ノ可哀ラシイ娘ガ
「新菊アヨイカイ、新菊アヨイカイ」ト振レテ歩ル
ク／長崎ノ「トラゴ買ヘマッシーンカイ」「ク
リクウェークワット」ト差別アリテ面白シ、別府ハ

何となし湯町のしづけさ無く、共進会にて粗野の風

漲ギレルニコノ売人ノ振声ヲキ、ハジメテ心和ムヲ

感ズ。／雨フリテ地獄めぐり出来ズ 音原の滝遠ク

ニ見ゆ／海鳥／19円40銭 高浜マデ汽船賃

(以下略)

公開の意思のない手記のため、片仮名、平仮名混交し、
当て字もあるが、振売の声に注意を向けて書き取るところ
など如何にも茂吉らしい。

「手帳」の記述と歌集との関係では、行動した主軸の
部分を詞書にし、茂吉の心に響き感銘を与えた事柄は歌
として表わしているといえる。

「あたたかき海辺の街は」の一首は、「手帳」の「可
哀ラシイ娘ガ」の記述に基づくもので、茂吉の代表作
では決していないが、各句の続き具合も自然で、平淡な表
現のなかに大正頃の別府の「海辺の街」の感じが出てい
るのではあるまいか。特に四句から五句への展開は、歌
集「あらたま」最後の歌で、長崎医専教授に赴任して間
もない大正六年十二月の次の作

朝あけて船より鳴れる太笛の

こだまはながし竝みよろふ山

の「こだまはながし」と、少し呼吸を置いて「竝みよ
ふ山」へと展開していく手法に通うところがある。

「手帳」中の「新菊」は作歌に当っては「春菊」と改
められた。なお、長崎で聞いていた「トローラゴ買ヘマッ
シーンカイ」の「トローラゴ」は海鼠のこと。北海部郡
でも同じくトローラゴと呼ぶことは「日本国語大辞典」に
見える。長崎在住のアララギ会員有江喜重郎氏にお尋ね
したところ、実際は「トローラゴカイマッシュェーンカイ」
(傍点佐藤)と言うが、茂吉は東北人であるから長崎弁
を正しく文字化するのが国難でなかったかと言われ、
「クリクワエークワットー」も「栗買ワンヘエー 旨カトー」
(「栗買いませんか。旨いですよ。」)の聞き誤りでは
ないかとのことであった。

「鳥の音も海にしば鳴く」の作は、「手帳」ではただ
「海鳥」と記したそのことを契機とし、それに題詞の
「大正八年夏一たび来りき」とが連係しあって一首となっ

た。上句には今のよう埋立になる前の北浜海岸の状景が出てゐる。それに繋がって下句には主観的な言葉を挟まないだけに、作者の氣持が却て伝えられており、これはこれで捨て難い作となっている。大正八年來別の題詞の記述は、「つゆじも」後記の「大正八年には同僚知人と共に熊本に遊びそれから阿蘇にのぼり、別府へ抜ける旅をし、」とある箇所と結びつく。しかし、この時の記録は、茂吉がヨーロッパから帰国直前の大正十三年暮の火災で消失しており、これ以上のことは不明である。茂吉の「手帳」一から四までの四冊は、留学する際に一緒に持って行った。そのため火難から免れることになった

三

「つゆじも」収載の歌の制作経過をみると次のようになる。

A、アララギのほか新聞や雑誌に掲載した歌（主として大正九年の終りまでに作られた歌が入る。）

B、「手帳」の中から昭和十五年八月の編集時に取入れられた歌。

① 「手帳」に記しているのをそのまま収めた歌。
② 「手帳」中の歌を改作したもの。または歌の一部を書いているのを一首に仕上げたもの。

③ 「手帳」中の記述をもとに新たに作歌したもの。「つゆじも」の一首毎に初出を調べ、「手帳」を検討してみると、別府の二首を含む「長崎を去り東上」の題目もとの十九首は、右のBの③に入る作である。

何れにしろ、二十年前に來訪したことを想起して、その当時の如く描いたのは、それだけ別府の印象が深かったからであろう。

大正十年二月、精神病学研究のためオーストリア及びドイツへ留学を命ぜられることになって長崎医専の教授を辞し、東京青山の自宅へ帰ることになった。それが「長崎を去り東上」である。三月十六日に長崎を立ち、博多、小倉を経て別府。そのあと船で高浜へ到り、松山、琴平、高松。そして中国に上陸して岡山、神戸、大阪、奈良、京都、米原と経て三月三十日に帰宅している。

右の地名は、上掲の別府における様子を記したと同様の詳しい詞書が続いているそれを辿ってのことであるが、

訪れた各地では旧知の人々に会い、医学部や医専のある

所ではその教授を訪ね、教室を参観している。大正十年当時、茂吉は四十歳で、留学するには晩学の感じもするが、大正三年から始まった第一次大戦で留学の機会を逸したことも遅れた理由の一つである。だが、留学するに当っては十分の用意をし、相応の成果を収めたい意欲は相当にあったようで、それはこの後に続く「手帳」にも明かに見える。このようなことから、帰京の途次、医学関係の人々や施設を訪問したのであろう。

前掲「つゆじも」詞書中の「保養院長鳥瀉博士訪問、博士は大学同窓也。」とあるのは、鳥瀉豊博士で、東大医学部を明治四十二年に卒業した（茂吉は卒業試験時、腸チフスに罹り、卒業は翌年になった。）今の朝見二丁目市営住宅になっている所に大正三年一月、壮大な結核療養所鳥瀉保養院を開設した。「朝見の山を背に前面が開けた地になったこの療養所は、たちまた評判と」（「大分の医療史」昭和五十五刊、五一七頁）なったことなどを知っていて、ここを訪問したのが茂吉来別の主目的であったと思う。

四

右の「長崎を去り東上」の中で、神戸に立寄ったことを記した詞書があるが、そこでは中村憲吉と会っている。憲吉も茂吉と共に伊藤左千夫の門で、アララギ創立の時から作歌に励んできた仲である。寡作ながら同じ写実短歌であっても、憲吉の作は茂吉と色合いが違い、着実に細かく鋭い面がある。人生体験を重ねるとともに歌風も深化し、人生の真相に迫り、哀韻の滲み出た秀歌を残した。近代短歌の上では忘失し難い存在である。

「中村憲吉全集」の年譜（第三卷所収）をみると、昭和二年（三十九歳）「一月末福岡市西南学院主催の九州専門学校短歌大会に出席し、帰路、耶馬溪、別府に遊ぶ。」とある。

当時、憲吉は大阪毎日新聞経済部の記者を辞めて、広島県双三郡布野村の生家に帰り、家業の酒造業に携わっていた。別府を訪れるまでを「日記」（全集第三卷）でみると、一月二十日に初めてその記事がみえて次のようにある。

昨日より降りし雪七寸位たまる。福岡旅行のことに

つき、地図、時間表出してしらべなぞす。地理歴史の案内にくらき故、旅程定まり難し。宇佐、太宰府、耶馬溪、別府は必ず行かむと思ふ。石仏にも行きたし。(以下略。この後の引用も含めて傍点は原文のまま)

実際に布野出発したのは一月二十八日で、同夜は広島に一泊。二十九日は下関に宿り、三十日に前出の年譜に記す歌会に出席し、同夜博多泊。翌三十一日は「西南学院の講演を頼まれて腹案もなくやる。甚だいや也。」など記しており、やはり博多泊。二月一日の記事は欠き、二日、三日は中津の田原広治宅へ泊り、四月にいよいよ別府に来ているが、「日記」でその部分は「夜別府につく、日名子旅館にとまる。」とある。

翌二月五日のところを前文記せば、

○別府大分に雪あるは珍らしと云ふ。朝砂湯を浴ぶ。大分連隊瓜生君との電話、交渉悪し。当方より出向く。○大分連隊にて外出際(小生に遇ひに)の瓜生君と会ふ。○自動車を備ひ歩く所、大友館跡(感ふかし)、

石仏、大臣塚、城、瓜生君の威徳寺の松。○夕共に別府に帰り地獄巡り。○夜アサリ、丸山君(女)来る。右の「大分連隊瓜生君」とは、大分市勢家町威徳寺の

故瓜生鐵雄氏のこと、当時は見習士官として大分連隊に入っていた。大正九年にアララギに入会しているから県下では最も古い会員であった。中村憲吉の選を受けていた代表の一人である。

別府到着の様子は、同日発信地を「別府日名子旅館より」として、福岡の児島善一郎へ送った絵葉書にも記されており(全集第四巻 書翰三五九) 「四日大雅堂(中津)、宇佐を廻り昨夜別府着、今日は大分に行き見物し、在營中の兵、瓜生君を訪問したく存じ居り候。」とある。

憲吉を案内したことは瓜生氏が後年著した「感慕泉」

(昭和四十六年刊)の「郷土を訪ねた歌人たち」に詳細に記している。「日記」中の石仏は大分市元町の石仏で、時間に縛られることの大い兵役にある身では、臼杵の石仏まで案内することは無理と判断した模様である。ま

た、海地獄で憲吉はハンカチに歌を書き、それを温泉染にしたのを瓜生氏へ与えたが、昭和二十年七月の戦災で焼失してしまったとのことである。「日記」に「○夜アサリ、丸山君（女）来る」とあるのは、一時アララギ会員であった浅利良道と丸山待子の二人である。なお、かつて瓜生氏から直接聞いたことだが、日名子旅館では風采の余り目立たない投宿者が、後刻、広島県の多額納税者で歌で高名な中村憲吉と知って、大慌てで上室に変わってもらったとのことである。

昭和二年は、憲吉の歌集では「軽雷集」の時期に当り、同年作として収録されている七十五首中には別府に関する歌は見当たらない。また全集の「補遺」には、昭和二年の作三首を収めているが、別府で作歌したものではない。海地獄でハンカチに書いた歌が或いは別府での作かと思われもするが、自作を手紙や日記に書いたりすることを特に戒め、歌に対して厳格な姿勢をとってきた憲吉が、即席に一首を作ったりすることは先ず考えられず、やはり自己の旧作を書いたものとみたい。

図は「斎藤茂吉全集 第二十七巻」所収「手帳四」の鶴田旅館に宿り、鳥潟保養院を訪問した記録の余白に記したものの転載。別府棧橋を出港した船上から鶴見岳、伽藍岳・高崎山（下）を望み、描いたものであろう。

